

30秒で伝える魅力

ふるさとCM大賞に出品

県内市町村制作のCM作品を紹介する「2015みやぎふるさとCM大賞」の発表審査会は11月26日、仙台市泉区のイズミティ21で開かれました。

CM大賞は、東日本放送が平成14年から毎年開催しているものです。今年は29市区町村から29作品の応募がありました。

本市からは、市観光物産協会が「水の絆」と題した作品を出品。水でつながる登米市を表現しました。審査の結果、惜しくも入賞は逃しましたが、構成などで高い評価をいただきました。発表審査会の模様は、1月3日午後3時55分から東日本放送で放映されます。



本市作品の「水の絆」は、登米市の豊富な水資源が生み出す魅力は美しく、唯一無二だということを伝えています。

健康寿命延伸に向け

大塚製薬と健康協定結ぶ

本市と大塚製薬の健康増進に関する連携協定締結式は11月19日、市役所で開かれ、布施孝尚市長と大塚製薬仙台支店の河野敦夫支店長が協定書を取り交わしました。大塚製薬は、本年度から本市と協働で健康寿命延伸に向けた講座などを実施しています。

同社が、県内の自治体と健康増進に関する連携協定を結ぶのは初のことです。布施市長は「本市の健康寿命は県内で下の方。市民の生活資質向上に向け、共に取り組んでいきたい」とあいさつ。河野支店長は「健康情報や事業などを提案し、登米市民の健康の一助となるよう取り組んでいきたい」と述べました。



食育セミナーなど食を通じた健康づくり、小売業者と連携しての健康状態の認知活動などを、協働で展開していく予定です。

登米市の未来に向け

子ども議会2015開催する

市内中学校の生徒が「議員」となって市長らと議論する「子ども議会」。「子ども議会2015」(とめ青年会議所主催)は11月8日、市役所議場で開かれました。

市内10校から選ばれた20人の子ども議員が登壇。自分たちが住む登米市のまちづくりについて、中学生の視点で質問し、布施孝尚市長、佐藤信男教育長らが、市の考えを述べました。議長を務めた川田真心さん(佐沼中2年)は「テレビで見る国会中継のようで、すごく緊張しました。議会を体験して、市民の一員であることを再認識しました。登米市がよいまちになるよう、私たちも頑張ります」と今後の抱負を述べました。



中学生に身近な街路灯の整備要望や全国的な課題である人口減少を止めるための施策についてなど、真剣に議論しました。

参加者 3000 人超え

30 回目のカップマラソン

「第30回カップハーフマラソン」は11月22日、登米総合体育館を発着点とするコースで開催され、過去最高の3050人が秋の登米路を駆け抜けました。レースはハーフ、10^{キロ}、5^{キロ}など30部門で競われ、午前9時半ハーフの部を皮切りに順次スタート。懸命に走るランナーたちに沿道から温かい声援が送られました。30部門のうち4部門で本市のランナーが優勝しました。

【男子】▶ハーフ 高校生～29歳 = 大坂雄一郎(中田町) 【女子】▶10^{キロ} 高校生～39歳 = 井波由希(追町) ▶2^{キロ} 女子小学生 = 川嶋心結(中田町) 【親子】▶2^{キロ} ペア = 小諸信道・俊介(中田町)



カップのコスチューム姿など、仮装するランナーもあり、沿道の人たちを楽しませました。

本番さながらの想定

上沼地区で洪水避難訓練

水害を想定した洪水避難訓練は11月15日、上沼ふれあいセンター・弥勒寺を本部に上沼地区で開催されました。関東・東北豪雨による県内各地区の堤防決壊などから、水害発生時の防災情報の伝達と安全な行動を学ぶこと、課題の明確化を目的に、上沼地区コミュニティ運営協議会が初めて実施しました。

住民約530人が、高台への避難や情報伝達などを訓練。佐藤弘志さん(中田町寺山)は「洪水想定訓練は初めて。連絡網の確立や若い人たちの参加が少なかったため、この点の改善が必要ですね」と今後に向けての課題を話していました。



洪水を想定し、コミュニティ単位での訓練実施は、市内で初の取り組み。当日は雨が降り、本番さながらの訓練となりました。

51年の功績認められ

秋山さん産業文化賞受賞

第61回竹駒産業文化賞授賞式は11月23日、岩沼市の竹駒神社で開かれ、豊里町二ツ屋の秋山廣さん(写真中央)が、竹駒産業文化賞(農業の部)を受賞しました。

秋山さんは、1965年から現在までの51年間、水稲奨励品種決定現地試験担当農家として活躍。県の奨励品種である「ひとめぼれ」「ササニシキBL」「ヒメノモチ」などは秋山さんのほ場の試験結果を踏まえて採用されています。

11月24日、市役所を訪れ布施孝尚市長に受賞を報告。「このような賞を受賞できたことはとても光栄」と受賞の喜びを語りました。



51年間継続しての活動は県内最長記録。秋山さんは、これからも新しい情報・技術に取り組んでいきます。